

幼児の「内発的動機づけ傾向」尺度の作成と検討

— 気質質問紙BSQを基にして —

陳 惠 貞¹⁾

動機づけは、教育現場において重要であることが盛んに指摘されてきた。幼い乳幼児にとって、保育者の働きかけは大切であることはいままでもない。日常生活の中で、幼い子どもの動機づけや意欲を引き出すため、「ほめてやる」・「賞罰を与える」・「競争させる」というような方法がよく使われている。また、「こうやりなさい」・「そうしなさい」というような子どもに対する指示や命令をよく耳にする。しかし、このような方法や手段が子どもの内発的動機づけにいかに関与する悪影響を与えるかについては多くの研究がなされてきた。例えば、外的報酬による動機づけは、その後のパフォーマンスに悪影響を与えるという結果が見いだされている (Deci, 1971; Lepper et al., 1973)。また、競争をさせることによって、子どもの注意の焦点は課題の中身ではなく、むしろ競争の結果、つまり勝つか負けるかにしぼられてしまう (Nicholls, 1984)。Ames (1984) は、特に遂行の低い子どもの自己概念にとっては、競争的目標構造は阻害的であると指摘した。さらに、常に競争に負ける子どもは、ますます学習動機を低下させてしまうことになる。以上のように、子どもの動機づけを引き出すために使われた方法が、かえって子どもの内発的動機づけを損なってしまう結果となる。

上述のようなこれまでの動機づけ研究は、状況的変数を操作して、いかに子どもの動機づけにマイナスの影響を与えるかを検討したものが大部分である。しかし、達成動機概念に代表されるように動機づけには個人の特性的側面があることを忘れてはならない。そこで本研究では、個人の本来持っている気質的な内発的動機づけの個人差を内発的動機づけ傾向として着目する。このような内発的動機づけ傾向の個人差によって、保育者の働きかけ方が異なるし、その結果として内発的動機づけの高まりも異なってくるはずであろう。さて、幼児の「内発的動機づけ傾向」は何によって測定できるのだろうか？ しかしながら、これまで本邦において幼児に関する動機

づけを測定する尺度は見あたらない。

過去の気質研究は幼児の行動が子どもの本来に持っている気質に左右されることを示唆している。しかし、動機づけと気質の関係については気質研究家である Chess & Thomas (1959) と Thomas & Chess (1977) が少々触れた程度であった。それ以来、残念なことに動機づけ研究に関連した気質研究はほとんど見あたらない。庄司 (1981) によれば、Thomas らが行動を What と How と Why という3つの側面からとらえることを指摘した。行動の3側面を簡単に表示すると次の通りである。

WHAT — Ability

HOW — Behavior Style (Temperament)

WHY — Motivation

Whatとは、「何を」するか、「何が」できるかという「能力」に関する側面である。Howとは、「どのように」するかという「行動様式」(つまり気質)に関する側面である。Whyとは、「何故」するかという「動機づけ」に関する側面である。ここで人間行動にある行動様式(気質)と動機づけに関連性があった。人間行動の現れは、まずある目的を達成するため、行動を起こす。反対に人間の行動様式から、その背後に隠されている動機を読みとれると言えよう。しかし、個人や状況によって、行動の目的は必ずしもはっきりと分かるわけではない。特に幼児の場合は、我々大人の目から見ればよく「わけの分からない行動をしている」ようにみえるが、追究すればそれなりに動機や文脈があるはずである。さらに、我々は自分の行動を説明できない幼児を理解するには、幼児の行動様式から読み取るしかないと思われる。それゆえ、本研究で気質研究の質問紙BSQ(幼児行動様式質問紙3~7歳用)を用いて、幼児の「内発的動機づけ傾向」尺度を開発しようとする。

BSQを用いた理由

幼児の個人特性を測定するための質問紙作成に当たって、McDevitt, S. C. と Carey, W. B. が開発した気質

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)

研究の幼児行動様式質問紙—BSQ (Behavioral Style Questionnaire for 3-7 year-old children, 1975) を水野 (未公開) が翻訳したもの、並びに日本語版 (佐藤・古田, 1982) を参考に作成した。この質問紙を参考にした第1の理由としては、一連の気質追跡研究における一貫性の面にあると思える。一連の気質追跡研究というのは、Revised Infant Temperament Questionnaire (RITQ¹⁾、Toddler Temperament Scale (TTS²⁾、本研究に用いた Behavioral Style Questionnaire (BSQ³⁾、そして Middle Childhood Temperament Questionnaire (MCTQ⁴⁾ などである。このように、乳児・幼児・児童という発達の段階に沿って行った追跡調査は、より子どもの性格を正確につかめると考える。さらに長年の追跡調査によって、特に臨床研究の分野で母子関係や気の難しい子どもの扱い方などでの実績が認められていることから、注目を集めている (Thomas et al., 1968, 1977; Chess & Thomas, 1984)。日本では佐藤を中心とするグループによって、研究が進められてきたものがある (1984年から1996年まで)。佐藤 (1988b) によれば RITQ, TTS, BSQ, MCTQ の4つの質問紙は「Carey とその共同研究者がニューヨーク追跡研究 (NYLS) における Thomas と Chess の気質コンセプトを基に、気質測定のために作成したもの」である。Thomas らの研究は面接法を用いて子どもの行動特徴を測定したため、時間的な制約があり、あまり大きなサンプルに実施しにくかったという弱点があると指摘された。それに対して、McDevitt と Carey が開発した質問紙尺度は、Thomas らが長年かけて収集した子どもの日常的行動の記述を生かしたものであり、「時間的な制約がある」と「大きなサンプルが取れない」といった弱点を克服したものである。

BSQを参考にした第2の理由は、国際的な共通性があることであろう。近頃国際比較が盛んに行われているが、佐藤 (1985b) と佐藤ら (1987b) によれば、アメリカのニューヨークと台湾の台北のゼロ歳児における気質の国際比較を1982年にすでに行った。そしてその日米比較は1984年に日本心理学会で発表された。その後、日本・アメリカ・ドイツの国際比較も行った (佐藤, 1990)。さらに、日本では宮城、沖縄、東京、横浜などの地域で研究が進んでいる。このように、McDevitt と Carey

- 1) RITQ — 生後4ヶ月から8ヶ月までの乳児適用質問紙
- 2) TTS — 1歳から3歳未満適用質問紙
- 3) BSQ — 3歳から7歳までの幼児適用質問紙
- 3) MCTQ — 8歳から12歳までの児童適用質問紙

が開発した質問紙は、世界で広く使われていると言えよう。以上の理由で幼児行動様式質問紙を参考にして、幼児の「内発的動機づけ傾向」を検討することにした。

行動様式質問紙の構成

行動様式質問紙の内容は、前述のように Thomas ら (1963) の9つの行動特性カテゴリーをモデルにして構成したものである。9つのカテゴリーとその定義を簡単にまとめてみると、以下の通りである。

- ①活動水準 (Activity level) : 活動に現われる運動の活発さ。
- ②周期の規則性 (Rhythmicity) : 食事、睡眠、排泄などの規則正しいさ。
- ③接近/回避 (Approach or withdrawal) : 新しい刺激に対する最初の反応。
- ④順応性 (Adaptability) : 新しい環境に対する慣れやすさ。
- ⑤反応強度 (Intensity of reaction) : 泣く・笑うなどの反応の強さ。
- ⑥敏感さ (Threshold of responsiveness) : 反応を引き起こすのに要する刺激の強さ。
- ⑦気分の質 (Quality of mood) : 親和的行動・非親和的行動の頻度。
- ⑧気の散りやすさ (Distractibility) : 進行中の行動が妨害されやすいかどうか。
- ⑨注意の範囲と持続性 (Attention span and persistence) : 特定の行動の持続性。

以上の Thomas らの9つ行動特性カテゴリーに基づき、Carey らが開発した気質研究の行動様式質問紙は全部で100項目がある。日本語版の幼児行動様式質問紙は、佐藤の研究グループが Carey らの幼児行動様式質問紙の100項目すべてを忠実に翻訳し、逆転項目も誤解のないように工夫したものである。

行動様式質問紙に残された問題

Gibbs ら (1987, 1989) は TTS と BSQ の両尺度の妥当性と信頼性について検討した。一方、日本では、菅原ら (1988, 1994) によると、Sanson らが RITQ と TTS を分析した結果は、Thomas らの想定した9次元とは必ずしも一致しない構造が指摘された。さらに、佐藤ら (1996) が東北心理学会で発表した「BSQの因子分析」の最新情報によれば、113名の幼児の7年間の完全追跡のデータを因子分析した結果、年齢によって因子構造が変わることは確かのようなのである。その他、平均値にはかなりの地域差が見られる (佐藤, 1987b; 古田 他, 1987, 1988, 1994)。追跡研究では地域によって別々の

基準値を使っているということで、異なる地域のデータにはあらかじめ行動様式質問紙を分析することが必要だと考えられる。ゆえに、この行動様式質問紙の信頼性と妥当性を再検討する必要がある。因子構造の不安定と尺度の信頼性・妥当性の問題が存在する限りは、RITQ/TTS/BSQ/MCTQの気質尺度は完璧な尺度とは言えない。

以上の問題を踏まえて、本研究では幼児用の行動様式質問紙(BSQ)をもとに「内発的動機づけ傾向」に関連した必要の項目だけを選定し、抽出した項目を検討することにした。ちなみに、項目内容を検討した上で、Thomasらの9つの行動特性カテゴリーの中から、活動水準・接近/回避・気の散りやすさ・注意の範囲と持続性の4つが選ばれた。この幼児「内発的動機づけ傾向」尺度を作成することによって、新たな尺度として幼児の内発的動機づけ傾向を測定できると考える。

方 法

調査期日と被験者：1994年5月6日から5月10日まで愛知県東海市にある私立幼稚園園児の親を対象に質問紙法を行った。園児数は585名で、うち3才児が125名(男児58, 女児67), 4才児が220名(男児120, 女児100), 5才児が240名(男児116, 女児124)である。質問紙配布の方法は担任の先生が園児に手渡し持参することである。親が自宅で記入し、できた時点で園児に持たせて回収した。回収の締め切り日が若干異なったが、1週間以内に打ち切った。回収数は536部であり、回収率は91.6%である。分析には統計パッケージSASを用いた。

質問紙の構成：「内発的動機づけ傾向質問紙」を作成するため、行動様式質問紙から活動水準(13項目)、接近/回避(11項目)、注意の範囲と持続性(10項目)、気の散りやすさ(10項目)という4つのカテゴリーが選ばれた(参考資料)。回答は「ほとんど~でない」が1で、「ほとんどいつも~である」が6で、6件法を用いた。

結果と考察

1. 因子分析結果

因子構造を検討するため、44項目に対して因子分析を行った。主因子法を用いて分析したところ、固有値は4.49, 4.09, 3.45, 2.35, 1.78というように減少していた。3因子解と4因子解でバリマックス回転を実行してみたが、解釈のしやすさという点から4因子解を採用した。因子負荷が0.38以上のものを見たところ、第1因子には項目24, 43, 31, 25, 12, 68, 50, 6, 86, 98が、第2因子には項目35, 40, 13, 44, 27, 90, 83, 73, 87が、第3因子には項目32, 17, 2, 71, 14, 4, 93, 26が、第4因子には項目85, 77, 51, 81, 66, 48, 89, 95が基準以上の因子負荷量を持っていた(Table 1)。項目内容をみたら、第1因子は「好奇心・積極性」尺度、第2因子は「持続性」尺度、第4因子は「集中力のなさ」尺度と命名した。しかし、第3因子については、項目内容を検討したところ矛盾が生じたので、解釈不可能となった。詳しく言うと、第3因子には「落ち着きがない」や「注意散漫」といった子どもの「多動性」を示す項目がほとんどであった。ただし、項目17「何かに熱中している時、呼ばれても気がつかない」と項目2「自分の好きなこと

Table 1 因子分析(Varimax回転)

*は逆転項目

番号	項 目 内 容	因子 I	II	III	IV	共通性
24.	新しい場所に行っても活発に動きまわる。	.73	.08	.04	.11	.56
43.	自分と同じ年代の見知らぬ子どもに近づいていける。	.71	.10	.00	.00	.52
31.	見知らぬ人に対し積極的な態度をとる。	.65	.08	.07	.02	.43
25.	なじみのある場所より、新しいところへ行くことを好む。	.48	.11	.10	.14	.27
12.	新しいことをやってみたがる。	.45	.38	.06	.07	.35
9.	走ったり、とびはねたりするゲームを喜んでする。	.37	.23	.11	.21	.25
58.	おとなしい室内遊びより、外で体をつかう遊びを好む。	.36	-.05	.15	.29	.24
70.	行きたいところへは走っていく。	.30	.18	.24	.29	.26
* 21.	幼稚園(保育園)に入園した時、3日間ぐらい母親から離れるのがいやがった。	-.36	.11	.08	.03	.15
* 68.	新しいことに取り組む気にさせるには励ましてやる必要がある	-.38	-.02	.15	.18	.21
* 50.	自分でできると思わなければ、手を出そうとしない。	-.41	.03	.14	.14	.20
* 6.	何か物事をする時、動作がのろい。	-.43	.07	.27	-.00	.26
* 86.	初めての訪問客を避ける様子をする。	-.56	.08	.03	.14	.33
* 98.	新しい場面においては引っ込み思案になる。	-.69	.02	.05	.17	.52

幼児の「内発的動機づけ傾向」尺度の作成と検討

35. きちんと習得してしまうまで投げ出さずに練習する。	.15	.57	-.26	-.06	.41
40. 興味のあることだと一つの活動に30分以上集中している。	.10	.56	.05	-.04	.32
13. テレビを見たり、音楽を聴いている時、おとなしくすわっている	-.03	.54	-.13	-.01	.31
44. 玩具やゲームで静かに遊ぶ。	.07	.51	-.16	.03	.29
27. 1時間以上、本を読んでいたたり、絵を見ていたりする。	-.04	.50	-.14	-.01	.27
90. 最後まで終えないとその遊びから離れるのをいやがる。	-.06	.49	.04	.14	.27
83. 立ち上がって何かしたりせずに、じっと長い（1時間以上の）テレビ番組を見ている。	-.05	.46	.04	-.00	.22
73. 難しいことに取り組んでいる時にはなかなかあきらめようとしない。	.23	.44	-.11	-.03	.26
* 87. お話を読んでもらっている時、落ち着きのない態度である。	.04	-.38	.36	.12	.29
32. じっとしていなくてはならない時に、それぞれと落ち着かない。	.29	-.24	.61	.01	.52
17. 何かに熱中している時、呼ばれても気がつかない。	-.12	.43	.59	.06	.56
2. 自分の好きなことに熱中していると何も聞こえない様子である。	-.10	.42	.57	-.10	.52
71. 親が指示している時、注意が散漫だったり、きちんと聞いていなかったりする。	.01	-.28	.55	.09	.39
14. 食事中でも食卓を離れたたり、離れたがったりする。	-.02	-.05	.51	.05	.27
4. 親と一緒に歩いていてもどんどん先に行ってしまう。	.29	-.03	.40	.02	.24
39. 新しい玩具やゲームに対する興味をその日のうちに失う。	-.08	-.27	.35	.05	.20
33. 玩具やゲームに”あきちゃった”と言う。	-.16	-.11	.30	.16	.15
94. 聞いている者が理解できないほど早口でしゃべる。	-.04	-.03	.30	.08	.10
* 67. 初めての食べ物でも口にしようとする。	.17	.03	-.22	.18	.11
* 54. 初めての食べ物でも1~2回出されれば食べるようになる。	.15	.10	-.25	.19	.11
* 93. 親が何か説明しようとしている時には、最初から最後まで注意深く聞いている。	.00	.46	-.46	.20	.47
* 26. 待っている間、静かにすわっている。	-.24	.45	-.51	.04	.51
85. 自分のしていることに関係のない音でも、聞こえるとそちらに注意を向ける。	.02	.01	-.06	.75	.56
77. 隣の部屋で声があると、なんだろうというように注意を向ける。	.06	.16	-.05	.70	.52
51. 誰かが部屋を出たり入ったりすると、そちらの方に注意を向ける。	-.08	-.01	.05	.67	.46
81. 親が部屋に入ってくると自分のしていることをやめて、そちらを見る。	-.12	.01	.01	.64	.43
66. 電話が鳴ると遊びをやめてそちらを見る。	.07	-.14	-.03	.52	.29
48. 何か注意をひくものがあると、自分のしていることをやめ、そちらに気を奪われる。	.01	.04	.22	.47	.28
89. まわりで他の人たちが話していると、自分のしていることを中断して耳を傾ける。	-.07	.02	.03	.44	.20
95. ドアのチャイムや電話の音に答えて、食事中でも食卓を離れようとする。	-.04	-1.1	.37	.39	.30
2 乗和	4.14	3.58	3.38	3.28	14.38
寄与率 (%)	9.41	8.14	7.68	7.45	32.68

に熱中していると何も聞こえない様子である」が集中力・熱中するの項目内容であった。「落ち着きがない・注意散漫」と「集中力・熱中する」は正反対の表現であり、そのうえ、項目17と項目2は逆転項目になっていないことから、下位尺度内の不一致が生じ、解釈不可能となった。ゆえに、第3因子を棄却することになった。

尺度の内部一貫性を検討するため、ピアソンの積率相関法を用いて、各下位尺度得点とそれを構成する各項目

得点の相関をとった結果をTable 2で示す。第1因子の「好奇心・積極性」尺度ではすべて $r = .44$ 以上の、第2因子の「持続性」尺度と第4因子の「集中力のなさ」尺度ではすべて $r = .48$ 以上の1%水準の有意な相関が得られた。

さらに、尺度の信頼性を検討するために、 α 係数を求めた。「好奇心・積極性」尺度では.79、「持続性」尺度では.70、「集中力のなさ」尺度では.74という値であっ

資 料

Table 2 各項目の平均値・標準偏差および各尺度合計得点と各項目得点の相関

	平均値	標準偏差	相 関
1 : 好奇心・積極性 (α係数=.79)			
24. 新しい場所に行っても活発に動きまわる。	4.38	1.42	.72
43. 自分と同じ年代の見知らぬ子どもに近づいていける。	3.98	1.52	.74
31. 見知らぬ人に対し積極的な態度をとる。	3.49	1.56	.68
25. なじみのある場所より、新しいところへ行くことを好む。	3.66	1.18	.49
12. 新しいことをやってみたがる。	4.59	1.31	.50
*68. 新しいことに取り組む気にさせるには励ましてやる必要がある。	2.86	1.32	.47
*50. 自分でできると思わなければ、手を出そうとしない。	3.76	1.26	.44
* 6. 何か物事をする時、動作がのろい。	4.12	1.37	.48
*86. 初めての訪問客を避ける様子をする。	4.46	1.35	.55
*98. 新しい場面においては引っ込み思案になる。	3.35	1.34	.70
合計得点	38.65	13.63	
平 均	3.87		
2 : 持続性 (α係数=.70)			
35. きちんと習得してしまうまで投げ出さずに練習する。	3.37	1.16	.59
40. 興味のあることだと一つの活動に30分以上集中している。	4.78	1.17	.57
13. テレビを見たり、音楽を聴いている時、おとなしくすわっている。	4.45	1.26	.55
44. 玩具やゲームで静かに遊ぶ。	4.10	1.18	.56
27. 1時間以上、本を読んでいたたり、絵を見ていたりする。	2.47	1.35	.59
90. 最後まで終えないとその遊びから離れるのをいやがる。	3.48	1.22	.49
83. 立ち上がって何かしたりせずに、じっと長い(1時間以上の)テレビ番組を見ている。	3.26	1.42	.56
73. 難しいことに取り組んでいる時にはなかなかあきらめようとするしない。	3.52	1.19	.48
*87. お話を読んでもらっている時、落ち着きのない態度である。	4.41	1.22	.51
合計得点	33.84	11.17	
平 均	3.76		
4 : 集中力のなさ (α係数=.74)			
85. 自分のしていることに関係のない音でも、聞こえるとそちらに注意を向ける。	4.15	1.12	.69
77. 隣の部屋で声があると、なんだろうというように注意を向ける。	4.28	1.16	.67
51. 誰かが部屋を出たり入ったりすると、そちらの方に注意を向ける。	3.82	1.29	.66
81. 親が部屋に入ってくると自分のしていることをやめて、そちらを見る。	3.49	1.32	.64
66. 電話が鳴ると遊びをやめてそちらを見る。	4.19	1.42	.60
48. 何か注意をひくものがあると、自分のしていることをやめ、そちらに気を奪われる。	4.54	1.07	.49
89. まわりで他の人たちが話していると、自分のしていることを中断して耳を傾ける。	3.02	1.09	.48
95. ドアのチャイムや電話の音に答えて、食事中でも食卓を離れようとする。	4.20	1.43	.55
合計得点	31.69	9.90	
平 均	3.96		

(*は逆転項目 相関係数はすべて $p < .01$ $n = 536$)

幼児の「内発的動機づけ傾向」尺度の作成と検討

た。すべての値は .70以上であり、やや安定したものであり、内部一貫性があるといえよう。

さらに、各因子間相関 (Table 3) をとってみたところ、「好奇心・積極性」と「持続性」尺度の間のみ有意な正の相関 (.14, $p < .01$) がみられた。全体的に極めて低い値ではあるが、「好奇心・積極性」の特性があればあるほど「持続性」があると言えよう。ちなみに、有意な相関が認められなかったが、「集中力のなさ」尺度は、「好奇心・積極性」と「持続性」の間に負の相関があるようである。つまり、統計的な支持にされなかったが、「好奇心・積極性」と「持続性」の特性を持つ子どもは比較的「集中力」という特性傾向があることが

示唆された。

2. 各尺度得点の相互比較

幼稚園児の特性について、各カテゴリーに関する親の評定は、Table 2 に各下位尺度とすべての項目内容、それぞれの平均値と標準偏差を示している。まず、6段階評定である6得点の中央値は3.5として、4つのカテゴリーの平均値は全体を通してしてみると、値が高くはないが、すべて中央値以上である。各カテゴリーの平均値は、「好奇心・積極性」尺度・「持続性」尺度・「集中力のなさ」尺度の順で、3.87, 3.76, 3.96となった。ここで、平均値の間に差があるか否かを検定するため、対応のある一元配置分散分析を行ったところ、1%有意水準で有意差が認められた。つまり、全体的にやや各カテゴリー通りのような内発的動機づけ傾向が見られると言えよう。わずかではあるが、比較的「集中力のなさ」尺度の平均値が若干高かった。この結果は、親は自分の子どもに対して、より集中力があってほしいと思っているのではないかと考察された。

Table 3 因子間相関

	好奇心・ 積極性	持続性	集中力 のなさ
好奇心・ 積極性	—		
持続性	.14**	—	
集中力 のなさ	-.07	-.05	—

(** $P < .01$)

3. 各尺度得点の年齢差と性差

各尺度得点について、性差と年齢差を確認するため3

Table 4 各尺度得点の平均値 (SD) と分散分析及び多重比較の結果

	好奇心	持続性	集中力のなさ	
3	男平均 (SD)	3.89 (.76)	3.55 (.65)	4.13 (.55)
	人数	54	55	55
歳	女平均 (SD)	3.84 (.92)	3.67 (.65)	4.24 (.77)
	人数	59	63	63
4	男平均 (SD)	4.03 (.72)	3.73 (.67)	3.82 (.72)
	人数	103	107	108
歳	女平均 (SD)	3.88 (.83)	3.75 (.62)	4.02 (.72)
	人数	86	86	87
5	男平均 (SD)	3.87 (.79)	3.83 (.71)	3.80 (.80)
	人数	103	105	105
歳	女平均 (SD)	3.70 (.81)	3.88 (.70)	3.97 (.73)
	人数	118	117	118
F	主 効 果			
	年 齢	2.23	5.14**	6.94***
	性 別	3.01	1.16	5.63*
値	交 互 作 用	0.24	0.19	0.16
	(年齢×性別)			
多 重 比 較	年 齢		5才 > 3才	5才・4才 < 3才
	性 別			男 < 女

(* : $p < .05$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$)

(年齢) × 2 (性別) の分散分析を行った。その結果 (Table 4) 「好奇心・積極性」尺度においては、年齢と性別の主効果と交互作用がみられなかった。「持続性」尺度においては、年齢の主効果 [F (2,527) = 5.14, P < .01] のみがみられた。ゆえに、多重比較 Tukey 法により検討したところ、5才と3才にのみ有意差がみられ、5才と4才または4才と3才には有意差がみられなかった。3才より5才の方が持続性がみられた。

「集中力のなさ」尺度においては、年齢の主効果 [F (2,530) = 6.94, P < .01] と性別の主効果 [F (1,530) = 5.63, P < .05] がみられ、交互作用はみられなかった。この結果から、男児より女児のほうが集中力がないことが分かった。さらに、年齢の主効果がみられたので、多重比較 Tukey 法によって、4才と5才より3才の方が集中力がないが、一方、4才と5才の間には差がないことが分かった。

以上から、「持続性」尺度と「集中力のなさ」尺度に年齢の主効果がみられた。平均値から、全体的に加齢に連れ持続性が増す、集中力のなさが減る傾向にあると言える。ここで、「集中力のなさ」尺度の分散分析の結果に性差が認められ、男児より女児の方が集中力がないといえる。一般的な認識では特に幼児の場合、男児の方がより活発で、落ち着きがない、集中できにくいというケースが女児より多くみられると思われる。しかし、一般的な印象と反して、「集中力のなさ」尺度には女児の

方が男児より集中できないという結果となった。ここで、項目の内容を検討することにした。Table 5 に男女平均値の差の最も大きい2項目をあげると、項目66「電話が鳴ると遊びをやめてそちらを見る」(-.34)と項目85「自分のしていることに関係のない音でも、聞こえるとそちらに注意を向ける」(-.22)である。すなわち、敏感さと過敏さといった内容を含む項目で男女差が大きいのであり、女児は周囲に対してより敏感に反応するのである。このように項目内容を検討すれば、女児の方が男児より集中ができないという結果が納得できるであろう。

討 論

まず、気質研究と動機づけ研究の接点について指摘したい。子どもの内発的動機づけを育てる際に、保育者の働きかけが必要とする。そして、働きかける時には、子どもの性格によって柔軟性を持ちながら適切な働きかけをしなければならない。ここで、動機づけ研究と気質研究は結びつくであろう。Chess & Thomas (1959) と Thomas & Chess (1977) が子どもの気質と動機づけの関連について少々触れたが、しかしその後、動機づけ研究に関連した気質研究の先行文献があまりない。自分の行動を説明できない幼児を理解するには、幼児の行動様式から読み取るしかないと思われる。それゆえ、本研究に紹介した気質研究の4つの質問紙は、子どもの気質を測定し、子どもの行動を理解するには大いに活用で

Table 5 下位尺度「集中力のなさ」における男女別の平均値 (標準偏差) と平均値の差

項 目 内 容	男児平均値 (標準偏差)	女児平均値 (標準偏差)	平均値の差
85. 自分のしていることに関係のない音でも、聞こえるとそちらに注意を向ける。	4.04 (1.15)	4.26 (1.08)	-.22
77. 隣の部屋で声がすると、なんだろうというように注意を向ける。	4.23 (1.16)	4.33 (1.17)	-.10
51. 誰かが部屋を出たり入ったりすると、そちらの方に注意を向ける。	3.72 (1.25)	3.91 (1.32)	-.19
81. 親が部屋に入ってくると自分のしていることをやめて、そちらを見る。	3.40 (1.13)	3.58 (1.32)	-.18
66. 電話が鳴ると遊びをやめてそちらを見る。	4.02 (1.44)	4.36 (1.05)	-.34
48. 何か注意をひくものがあると、自分のしていることをやめ、そちらに気を奪われる。	4.50 (1.08)	4.59 (1.05)	-.09
89. まわりで他の人たちが話していると、自分のしていることを中断して耳を傾ける。	2.97 (1.10)	3.08 (1.08)	-.11
95. ドアのチャイムや電話の音に答えて、食事中でも食卓を離れようとする。	4.14 (1.46)	4.26 (1.40)	-.12

n = 536 (男児268 ; 女児268)

きるであろう。だが、これほど広く使われている気質研究の質問紙に問題が残っていないわけではない。すなわち、Thomasらの想定した9つのカテゴリーの基で作られた行動様式質問紙は、因子構造の不安定さと尺度の信頼性・妥当性の不十分さが指摘できる。とは言うものの、これまでこの4つの気質尺度は、気質研究の分野では広く使用されてきたという実績を否定できない。一方、項目群に関して事前に仮説が成立する場合は、より仮説適合的なプロクラステス型の因子回転法の適用が望ましいという知見がある(柏木, 1993)。従って、プロクラステス因子回転法で因子構造を再検討することは有意義であろう。

本研究の目的は、幼児の「内発的動機づけ傾向」尺度を作成し、検討することである。幼児の達成行動は、幼児の本来持っている気質に大いに左右されると思われる。まず、ここで指摘しておきたいのは、筆者が想定した「内発的動機づけ傾向」は、好奇心・持続性・集中力の3成分から構成されることである。ここで集中力といったのは、因子として「集中力のなさ」が抽出されたが、意味的には反転して解釈すべきと考えたためである。物事に対する好奇心が強くて、長続きができ、さらに集中力のある子どもは、より内発的動機づけ傾向が高いと考える尺度が作成された。また、信頼性として内部一致性を検討した結果、ほぼ満足できるものとなった。これは好奇心と持続性の間に低い正の相関があるものの、ほぼ独立していると考えることができる。すなわち、ある1つの傾向が高いことが必ずしもその他の傾向も高くなるとは限らないことを意味している。「持続性」と「集中力」の特性は加齢に連れ増す傾向が認められ、一般的な発達の常識と一致すると思われる。それ故、この結果は尺度の妥当性をもつ1つの証拠と考えることができよう。男女の性差については、「集中力」のみ有意差がみられ、男児より女児の方が集中力がないことが分かった。この結果については、世間一般の認識と異なると思われるが、項目内容から検討すると、女児の環境に対する敏感さの特性から女児の方が集中できないという見方もできよう。すなわち、男児が女児より自分の課題遂行に没頭でき、周囲にかまわず集中できるという解釈もできよう。

今後、本研究に提案した「内発的動機づけ傾向」尺度を利用して、幼児の比較的恒常的な内発的動機づけ傾向の個人差を測定し、個人にふさわしい動機づけの仕方を検討していく研究が可能であろう。たとえば、好奇心が高く、持続性や集中力が低い子どもに対する保育者の対応の仕方と好奇心が低く、持続性が高い子どもの対応の仕方が異なるものであろう。保育者は子どもの内発的動機づけ傾向を把握したうえで、適切な働きかけ方によって、

より確実に・正確に子どもの内発的動機づけを育てることが期待される。

引用文献

- Ames, C. 1984 Competitive, cooperative, and individualistic goal structures; A cognitive motivational analysis. In Ames R. E. and Ames, C. (Eds) Research on Motivation in Education vol.1 Student Motivation. Academic Press.
- Carey, W. B. & McDevitt, S. C. 1977 Revised Infant Temperament Questionnaire (for 4 to 8 month old infants).
- Chess, S. & Thomas, A. 1959 The Importance of Nonmotivational Behavior Patterns in Psychiatric Diagnosis and Treatment *Psychiatric Quarterly* 33:326.
- Chess, S. & Thomas, A. 1984 Origins and Evolution of Behavior Disorders From Infancy to Early Adult Life Brunner/Mazel, Inc.
- Deci, E. L. 1971 Effects of externally mediated rewards on intrinsic motivation. *Journal of personality and social psychology*, 18, 105-115.
- Fullare, W., McDevitt, S. C., Carey, W. B., 1978 Toddler Temperament Scale.
- 古田俊文男・佐藤俊昭・島袋恒男 1987 気質と発達の追跡的研究V-(2) BSQの得点にみる地域差—日本心理学会第51回大会発表論文集, 502.
- 古田俊文男・佐藤俊昭 1988 気質と発達の追跡的研究VI-(2) 気質得点にみられる地域差の検討—日本心理学会第52回大会発表論文集, 16.
- 古田俊文男・佐藤俊昭 1994 気質と発達の追跡的研究X—BSQの地域差の検討—日本心理学会第58回大会発表論文集, 287.
- Gibbs, M. V. & Reeves, D. & Cunningham, C. C. 1987 The application of temperament questionnaires to a British sample: issues of reliability and validity *J. Child Psychol. Psychiat.* Vol. 28, No.1, 61-77.
- Gibbs, M. V. & Cunningham, C. C. & Reeves, D. 1989 Technical Note: A Reply to Carey and McDevitt *J. Child Psychol. Psychiat.* Vol. 28, No.1, 61-77.

- Hegvik, R. L., McDevitt, S. C. & Carey, W. B. 1980 Middle Childhood Temperament Questionnaire.
- 柏木繁男・和田さゆり・青木孝悦 1993 性格特性の BIG FIVE と日本語版 ACL 項目の斜交因子基本パターン 心理学研究64巻2号, 153-159.
- Lepper, M. R., Greene, D. & Nisbett, R. E. 1973 Undermining children's intrinsic interest with extrinsic reward: A test of the "overjustification" hypothesis. *Journal of personality and social psychology*, 28, 129-137.
- McDevitt, S. C. & Carey, W. B. 1975 Behavioral Style Questionnaire (for 3-7 year old children).
- Nicholls J. G. 1984 Conceptions of ability and achievement motivation. In Ames R. E. and Ames, C. (Eds) *Research of Motivation in Education vol.1 Student Motivation*. Academic Press.
- 佐藤俊昭 1985b 子どもの気質の追跡研究—序報— 東北大学教養部紀要43号。
- 佐藤俊昭 1988b 子どもの気質の追跡研究—第2報— 日本語版 ITQ-R とその使用経験 東北大学教養部紀要49号, 195.
- 佐藤俊昭 1990 子どもの気質の追跡研究—第3報・1～2歳児の気質とその安定性 東北大学教養部紀要53号, 295-318.
- 佐藤俊昭・川添良幸・仁平義明 1987b 子どもの気質の追跡研究—第1報—仙台とその近郊のゼロ歳児の気質 東北大学教養部紀要47号, 138-159.
- 佐藤俊昭・北村晴朗 1984 気質と発達への追跡的研究Ⅱ—(1) 1歳6ヶ月児の気質— 日本心理学会第48回大会発表論文集, 478.
- 佐藤俊昭・北村晴朗 1985a 気質と発達への追跡的研究Ⅲ—(1) 2歳すぎまでの追跡— 日本心理学会第49回大会発表論文集, 663.
- 佐藤俊昭・古田俊文男 1982 BEHAVIORAL STYLE QUESTIONNAIRE (1975) 日本語版 東北大学
- 佐藤俊昭・古田俊文男 1986 気質と発達への追跡的研究Ⅳ—(1) 3歳すぎまでの追跡— 日本心理学会第50回大会発表論文集, 504.
- 佐藤俊昭・古田俊文男 1987a 気質と発達への追跡的研究Ⅴ—(1) 4歳すぎまでの追跡— 日本心理学会第51回大会発表論文集, 501.
- 佐藤俊昭・古田俊文男 1988a 気質と発達への追跡的研究Ⅵ—(1) 5歳すぎまでの追跡— 日本心理学会第52回大会発表論文集, 16.
- 佐藤俊昭・古田俊文男 1989 気質と発達への追跡的研究Ⅶ—(1) 6歳すぎまでの追跡— 日本心理学会第53回大会発表論文集, 11.
- 佐藤俊昭・古田俊文男 1992 気質と発達への追跡的研究Ⅷ—(1) 7歳すぎまでの追跡— 日本心理学会第56回大会発表論文集, 97.
- 佐藤俊昭・古田俊文男 1994 気質と発達への追跡的研究Ⅸ—(1) 8歳すぎまでの追跡— 日本心理学会第58回大会発表論文集, 286.
- 佐藤俊昭・古田俊文男 1996 「BSQの因子分析」 東北心理学会第50回大会発表論文集, 印刷中(私信により)。
- 菅原ますみ・青木まり・北村俊則・島悟 1988 乳児期における気質的特徴の構造—日本語版 Revised Infant Temperament Questionnaire の検討— 湘北紀要第9号, 157-163.
- 菅原ますみ・島悟・戸田まり・佐藤達哉・北村俊則 1994 乳幼児期にみられる行動特徴—日本語版 RITQ および TTS の検討— 教育心理学研究 42巻3号, 315-323.
- 庄司順一・前川喜平 1981 乳児の気質—その意義と評価法— 小児科診療44巻8号, 9-16.
- Thomas, A. & Chess, S. & Birch, H. G. & Hertzog, M. E. & Korn, S. 1963 *Behavioral Individuality in Early Childhood*. New York University Press, 40-42.
- Thomas, A. & Chess, S. 1977 *Temperament and Development Chapter 13* Brunner/Mazel, Inc 175-182.
- Thomas, A. & Chess, S. & Birch, H. G. 1968 *Temperament and Behavior Disorders in children* New York University Press, 3-52.

謝 辞

本稿の作成に当たり、指導教官の速水敏彦教授と先輩の水野理恵さんに暖かいご指導をいただきました。資料・文献収集の段階で、東北福祉大学の佐藤俊昭先生と湘北短期大学の菅原ますみ先生のご協力をいただきました。調査の際に、上野台幼稚園の理事長・園長先生を始め、幼稚園の先生方、そして園児の親の方々に暖かいご支援とご協力をいただきました。ここで併せて、以上の方々に感謝申し上げます。

(1996年9月13日 受稿)

【参考資料】

1 活動水準

- 4. 親と一緒に歩いていてもどんどん先に行ってしまう。
- * 6. 何か物事をする時、動作がのろい。
- 9. 走ったり、とびはねたりするゲームを喜んでする。
- * 13. テレビを見たり、音楽を聴いている時、おとなしくすわっている。
- 14. 食事中でも食卓を離れたり、離れたがったりする。
- 24. 新しい場所に行っても活発に動きまわる。
- * 26. 待っている間、静かにすわっている。
- 32. じっとしていなくてはならない時に、そわそわと落ち着かない。
- * 44. 玩具やゲームで静かに遊ぶ。
- 58. おとなしい室内遊びより、外で体をつかう遊びを好む。
- 70. 行きたいところへは走っていく。
- 87. お話を読んでもらっている時、落ち着きのない態度である。
- 94. 聞いている者が理解できないほど早口でしゃべる。

2 接近／回避

- * 12. 新しいことをやってみたがる。
- 21. 幼稚園（保育園）に入園した時、3日間ぐらい母親から離れるのがいやがった。
- * 25. なじみのある場所より、新しいところへ行くことを好む。
- * 31. 見知らぬ人に対し積極的な態度をとる。
- * 43. 自分と同じ年代の見知らぬ子どもに近づいていける。
- 50. 自分でできると思わなければ、手を出そうとしない。
- * 54. 初めての食べ物でも1～2回出されれば食べるようになる。
- * 67. 初めての食べ物でも口にしようとする。
- 68. 新しいことに取り組む気にさせるには励ましてやる必要がある。
- 86. 初めての訪問客を避ける様子をする。
- 98. 新しい場面においては引込み思案になる。

3 注意の範囲と持続性

- * 27. 1時間以上、本を読んでいたたり、絵を見ていたりする。
- 33. 玩具やゲームに”あきちゃった”と言う。
- * 35. きちんと習得してしまうまで投げ出さずに練習する。

- 39. 新しい玩具やゲームに対する興味をその日のうちに失う。
- * 40. 興味のあることだと一つの活動に30分以上集中している。
- 71. 親が指示している時、注意が散漫だったり、きちんと聞いていなかったりする。
- * 73. 難しいことに取り組んでいる時にはなかなかあきらめようとしない。
- * 83. 立ち上がって何かしたりせずに、じっと長い（1時間以上の）テレビ番組を見ている。
- * 90. 最後まで終えないとその遊びから離れるのをいやがる。
- * 93. 親が何か説明しようとしている時には、最初から最後まで注意深く聞いている。

4 気の散りやすさ

- * 2. 自分の好きなことに熱中していると何も聞こえない様子である。
- * 17. 何かに熱中している時、呼ばれても気がつかない。
- 48. 何か注意をひくものがあると、自分のしていることをやめ、そちらに気を奪われる。
- 51. 誰かが部屋を出たり入ったりすると、そちらの方に注意を向ける。
- 66. 電話が鳴ると遊びをやめてそちらを見る。
- 77. 隣の部屋で声がすると、なんだろうというように注意を向ける。
- 81. 親が部屋に入ってくると自分のしていることをやめて、そちらを見る。
- 85. 自分のしていることに関係のない音でも、聞こえるとそちらに注意を向ける。
- 89. まわりで他の人たちが話していると、自分のしていることを中断して耳を傾ける。
- 95. ドアのチャイムや電話の音に答えて、食事中でも食卓を離れようとする。

ABSTRACT

A New Scale of Intrinsic Motivational Tendency for Early Children — Based on Temperament Questionnaire BSQ —

Huei-Chen CHEN

The purpose of this paper is to construct the scale for intrinsic motivational tendency for early children. Motivation in early children depend on not only situational factors but also temperamental ones. So far, however, the latter factors have not been paid more attention than the former factors. In this study, the latter factor is named as intrinsic motivational tendency.

Referring to temperament questionnaire BSQ, forty four items to measure intrinsic motivational tendency were prepared for making a new scale. The questionnaire consisting of these items was administered to 536 mothers of the children aged 3-6 years old in a kindergarten. They were asked to rate on 6-point scales.

Factor analysis revealed intrinsic motivational tendency was classified into three factors: curiosity and activity; persistence; concentration. On the basis of this result, three subscales for intrinsic motivational tendency were made. Internal consistency of each subscale was as high as expected. Further, through the examination of age and sex differences, it is found that persistence and concentration increase with age and that concentration is higher in boys than in girls.

Finally, the remained problems were discussed to refine the new scale in the future.

Keywords : intrinsic motivation, temperament, BSQ, early children